

国際交流オンライン企画④ SPECIAL LECTURE の報告

〈はじめに〉

第4回となる国際交流オンライン企画が、2022年3月9日に開催されました。国際交流オンライン企画では毎回、海外にいる方々とZOOMを通して交流を行なっています。

今回は、パーカッショニストのジェイムス・ドイル先生をお招きし、「オンライン演奏でできること」についてレクチャーしていただきました。以下に、第4回国際交流オンライン企画の報告をします。

〈ジェイムス先生のご紹介〉

菅生千穂先生より、ジェイムス先生のご紹介がありました。ジェイムス先生は、教育者・コラボレーションアーティストとしても活躍されています。協定校アダムス州立大学准教授、音楽授業のゲスト講師、中之条ビエンナーレ2017の演奏者、そしてGFLサマーキャンプ特別講師として、以前より群馬大学と交流がありました。また、音楽の菅生先生や美術の林耕史先生とも交流があります。

〈ピュージェット・サウンド大学の紹介〉

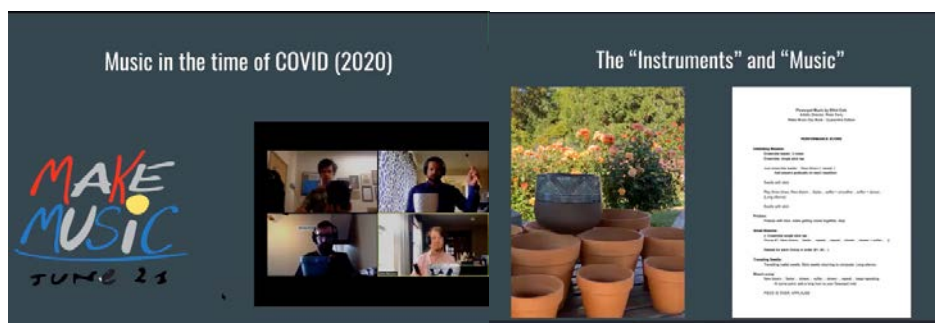
ピュージェット・サウンド大学は、現在、ジェイムス先生がいらっしゃる大学です。海岸沿いにあり、シアトルやバンクーバーにも近いそうです。前任校のアダムス州立大学との地理的な違いをお話しされていました。



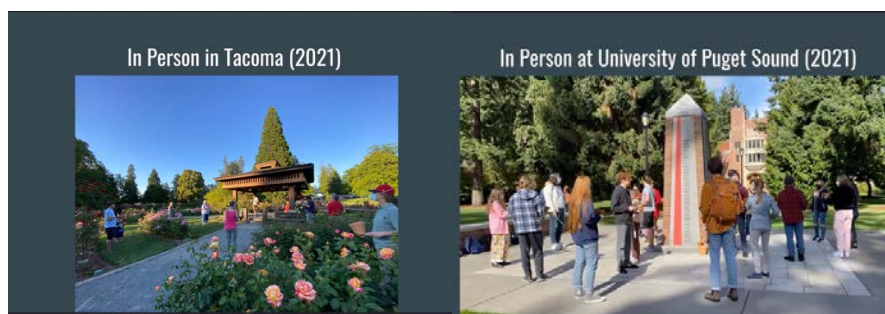
〈レクチャー① Flowerpot Music〉

ジェイムス先生より、『Flowerpot Music』についてレクチャーをいただきました。この曲は2020年春に、作曲家のエリオット・コール氏が考案した作品です。新型コロナウイルスのパンデミック下でも、オンラインで演奏できる曲になっています。世界中の打楽器奏者がエリオット・コール氏の呼びかけによって集まり、オンラインで9時間の演奏を行なったそうです。

『Flowerpot Music』は、プロの打楽器奏者だけではなく、誰でも演奏できるように作られた曲です。曲名の通り、植木鉢をマレットで叩いて演奏します。五線譜ではなく言葉で演奏方法が記されており、五部編成のような楽曲です。



ジェイムス先生は、他にも様々な人々と『Flowerpot Music』を演奏されてきました。昨年度は、群馬大学の音楽専攻の学生と共に、オンライン演奏されました。また、先生の住んでいらっしゃるタコマという都市では市民の方々と、ピュージェット・サウンド大学では学生らと、対面で演奏されたそうです。そして今年度も、群馬大学の音楽専攻の学生とセッションが行われました。



〈Flowerpot Music の演奏に参加した学生の発表〉

レクチャー①でも紹介があったように、今年度の授業で、ジェイムス先生と共同教育学部音楽専攻の1年生が『Flowerpot Music』を演奏しました。参加者を代表して、GFL 生の本間さくらが感想を発表しました。

①楽しかった点

音符の書かれた楽譜がないので、即興性に魅力を感じました。また、植木鉢や食器から奏でられる音にも、魅了されました。マリンバやシロフォン、ビブラフォンを混ぜたような音が鳴り、とても癒される音色です。

②今回の経験から学びに繋がった点

ZOOM を利用することで、コロナ禍でも合奏ができることに感動しました。また、国籍も言葉も異なるけれど、共に演奏ができたという点で「音楽の力」を感じることができました。

③他の学生の感想の紹介

演奏に参加した他の学生の感想も紹介しました。「先生の動きを見て叩き方を工夫した」、「画面の向こう側で響いている音を想像しながら演奏した」という声がありました。また、「植木鉢や食器に水を入れたら、音が変わるのだろうか」という疑問をあげていた学生もいました。

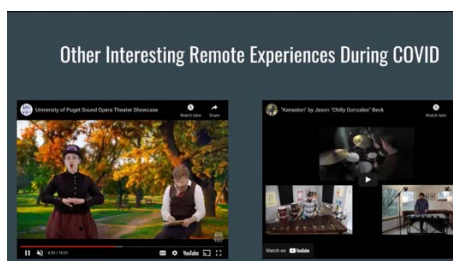
④この経験をどのように活かしていくか

植木鉢とマレットだけで楽しめるという点から、ぜひ音楽の授業に取り入れてみたいと感じました。また、国籍も住んでいる場所も違うジェイムス先生との合奏を経験し、様々な国籍の人と演奏してみたいという気持ちも生まれました。



〈レクチャー② オンライン演奏の可能性〉

ジェイムス先生は『Flowerpot Music』以外にも、コロナ禍における演奏に携われてきました。グリーンスクリーンの前で撮影した動画を繋ぎ合わせたり、他の打楽器奏者と演奏動画を一つにしたりなど、リモートでも合奏をしているような動画を作成されたそうです。



〈ジェイムス先生からの最後のコメント〉

「新型コロナウイルスの流行の収束も望んでいますが、同時に、海を超えて演奏を行える

ようなリモート技術の発達も望んでいます」と仰っていました。

〈質疑応答・交流〉

ジェイムス先生と、集まって下さった先生方や音楽専攻の学生が言葉を交わし合っていました。

〈終わりに〉

音楽教育を学ぶ者、そして GFL 生として、海外の先生と交流できる機会を得られたことは本当に光栄です。たとえ離れていても、技術がなくても、言葉が異なっても、心を通わせれば音楽は奏でられる、ということを身をもって感じた国際交流企画でした。

〈文責〉

共同教育学部 音楽専攻 1 年 本間さくら